

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業 [精神障害分野]）
分担研究報告書

勤労者うつ病患者のリワーク非利用群における、復職成功予測因子の検索

分担研究者 中村 純 産業医科大学医学部精神医学 教授

研究要旨：休職したうつ病患者を対象に通常の薬物療法や精神療法を行い、生活リズムや精神症状が十分回復し、うつ病が寛解した患者を対象に復職判定の生物学的指標を見出すことを目標に研究を行った。対象患者は、精神科医が復職を決定時期に活動性が高いうつ病とそうでない人とを分けた。その結果、活動性が低い人は高い人に比べて約3倍再休職に至ることが明らかになったが、復職決定時に測定した脳由来栄養因子（BDNF）値は、回復したうつ病患者を活動性が高い人と低い人を区別できなかった。そして、血中BDNF値は、復職判定時の生物学的指標にはならないことが明らかになった。今後は、われわれが行っている認知機能検査、復職準備性評価シートに加えて、アクチグラムの結果やモノアミン代謝産物、さらには免疫関連物質などの生物学的な指標を多角的に組み合わせて、復職判定の指標を見出したいと考えている。

A. 研究目的

今までに、我々は勤労者うつ病患者がリワークプログラムを使用しないで通常診療では、復職継続率が低いことを報告した(堀ら 2013)。今回我々は、リワーク非利用患者が復職時に復職成功を予測するバイオロジカルマーカー等の検索を行った。

B. 研究方法

DSM-IVで大うつ病性障害の診断基準を満たし、休職中だったが復職した患者54名を対象とした。復職決定時に活動性の高い群（N=30）と低い群（N=24）に分け、その後の復職継続率を追跡調査した。また復職決定時に血中BDNF値を測定し、復職成功群と復職失敗群とを比較検討した。本研究は、産業医科大学倫理委員会の承認を得ており、被験者からは全て口頭および文書にて同意を得ている。

C. 研究結果

活動性の低い群では高い群と比較して累積生

存率は低くLog-rank testで、 $\chi^2 = 4.65$, $p = 0.03$ だった。Cox 比例ハザードモデルを使用して分析したところ、再休職のハザード比は3.28だった。復職決定時の血中BDNF濃度は復職成功群と失敗群で差はなかった。

D. 考察

復職決定時に活動性の評価や生活リズムの確立は精神症状が十分改善した勤労者うつ病患者のリワーク非利用患者では復職予測する可能性がある。その一方で血中BDNF濃度からは復職予測は難しい。

E. 結論

うつ病勤労者がリワーク非利用時には精神症状評価以外に、活動性の評価を行うことが有用であることが示唆された。その一方で、復職成功を予測する生物学的な指標は現時点では明らかではない。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし（2014年度の学会で発表予定）

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

2. 実用新案登録

3. その他